

2023. 5. 18



地域日本語支援ニュース こだま 第 431 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

■ともに生きる：千葉県四街道市から■

千葉県四街道市には、この 10 年の間に多くのアフガニスタンの家族が暮らすようになりました。家事に追われ、日本語習得もままならない一家の女性たちを身近で支えてきたのは四街道国際交流協会（YOKKA）のボランティアです。皆から「お母さん」と慕われる協会の姫野あつ子さんに、この地にたくましく根付こうとしているアフガン女性たちの生活と課題についてご寄稿いただきました。

.....

隣のアフガニスタン人—共に笑い、共に泣き、心の壁をなくして

四街道市国際交流協会 日本語学習部会

副部長 姫野 あつ子

◆四街道のアフガニスタン人たち

今から 10 年ぐらい前までは、市内の通りやスーパー等でアフガニスタン女性を見かけることはあまりありませんでした。ですから、ヒジャブをかぶ

り、ロングスカートを履く独特の姿に、遠まわしに好奇の目で見る市民が多かったように思います。しかし今はベビーカーを押しながら歩いているアフガニスタン女性の姿をいたるところで見かけるので、そばにいても誰も気にしません。今年3月末日現在、四街道市に在住のアフガニスタン人は1,011名、世帯数423と全国1位となりました。

2010年頃からイスラム教シーア派の少数民族ハズラ人が、成田空港に近く、土地が広い四街道市や佐倉市周辺に中古車部品輸出を仕事としてヤードを持ち、経営が安定したところで家族を呼び寄せています。この10年ぐらいの間に家族で四街道に住み着いたアフガニスタン人は急増し、永住権を取得した人もいます。狭いアパート暮らしから戸建て住宅を購入して兄弟2家族と一緒に大家族で暮らしているところも珍しくありません。来日した子供達も幼稚園や学校に通い、たちまち日本語が話せるようになりました。給食は宗教上の理由で食べられず、毎日弁当持参ですが、教室では日本人の子と肩を並べ仲良く勉強しています。

◆「日本人といっぱい話したい」

そんな中で専業主婦である女性達が家族の中で一番日本語を話せないということ。本国でも満足な教育が受けられずペルシャ語の読み書きも難しい人もいて、日本語を習得するにはさらに時間を要します。そんな彼女達に定年後の教師、サラリーマン、保育士等経歴もさまざまな人達がボランティアとして日本語講師を引き受けています。人生経験豊富なボランティア講師にとっても改めて日本語の勉強のやり直しになるし、外国籍の人達との触れ合いが楽しく新鮮だと意欲的です。

週2回の日本語教室にベビーカーに幼子を乗せ20~30分歩いて通う彼女達は、治安が悪い本国での生活から解放され、「日本はまるで天国」と、思い切り自由に外出できる喜びを味わっています。しかし教室以外で日本人と関わりを持つことができず、スマホ片手に近所に住むアフガニスタンの友達、家族、離れ離れの姉妹と頻りに母国語だけで会話をしています。そこに長年住んでも日本語会話力上達を妨げる原因があるのかも知れません。日本での生活についてアンケート（注）をしたところ「本当は日本人といっぱい話したい。日本語を早く覚えたい。日本人の友達が欲しい」と書いてありました。文字にして初めて本音を打ち明けられました。ペルシャ語しか話せない彼女達と身振り手振りの会話から始まり、数字、時計の見方、日常の挨拶など就学前の子が使う絵本等を使って教えます。でも、たとえ言葉の違いは

あっても、感情表現は同じ人間同士。最初は日本人に対する警戒心からか硬い表情が多かった彼女達も、お互い信頼関係ができると次第に打ち解け、外出先で出会うと向こうから挨拶をしてくれたり、手作りクッキーを差し入れてくれたり、自宅にも招いてくれ、家族とも交流できるようになりました。

◆芽生えてきた自立心

コロナ禍で途中勉強できなかつた年もありますが、当時ベビーカーに乗っていた子供達も成長し、今では日本人と変わりなく日本語を話し、中学、高校へと進学しています。病院、市役所、学校等は子供が通訳として同行し、活躍しています。日本で生まれ育った子も多く、母国語の読み書きができないのを心配した親がオンラインで逆にペルシャ語を学ばせている家庭もあります。在日10年余りのベテラン女性達に至っては子育ても一段落し、念願の運転免許を取得し、さらにはハローワークで仕事を探す人も出てきて、彼女達から自立心が芽生えてきたように思えます。朝早くから夜遅くまで休みなく働く夫を支え、4～5人の子供の世話から家事一切をこなし、料理も全て手作り、1日3回のお祈りも欠かしません。イスラム教の行事や個々の用事で欠席することも度々で、日本語習得にはかなりの時間がかかりそうですが、焦らず、根気よく、彼女達に寄り添っていく覚悟です。本国では自分の楽しみ、夢を後回しに全て家族のために注いできた第一世代の親達は、自分のかなわなかった夢を子に託し、改めて勉強の大切さを実感し、高校、大学進学にも積極的になってきました。

その子供達にも変化が……。

日本で教育を受けて育ち、この国で生きていくのに何が必要か、何が正しいか、自分で考え判断し、親に対しても意見を言えるようになってきています。これから何年か後の彼らの成長と活躍が楽しみです。

◆新たな一歩へ

最近ではアフガン女性達のために、四街道市保健センターの協力も得て女性セミナー（乳がん、肺がん、子宮がん等の定期健診の重要性、子育ての仕方、歯みがき訓練、ワクチン接種、その他女性に関する問題）など通訳も交えて開催しましたが、たくさんの女性達が参加し、セミナー後も個人的に相談する人が多く、関心の深さを感じました。また母国語でカブール大学教授

の講演があった時は講演後、教授を取り囲み熱心に質問する彼女達の姿が印象的でした。これまで千葉大学、上智大学移民研究の先生方にお力添えを頂き、いろんな問題に取り組み、イベントも開催してきました。最近ではハラル食品弁当や学校給食の実現化に向け、16名の参加者を集めアフガン料理の試食会を開きました。日本語教室に通う2名のアフガン主婦がメニューを考え、予算内で材料を買い、調理方法、盛り付け、時間も測って参加者の目の前で調理してもらいました。普段から大家族の料理を作っている彼女達にとってはお手の物。大量の食材を難なくさばき、手際よく時間内に盛り付けし、参加者も驚く見事な出来映えでした。大好評の味に自信をつけた彼女達。これからももっと作りたいと意気込んでいますが、行政を巻き込んでの実現化を目指してようやく動き始めたばかりです。

自分達の置かれた境遇に決して弱音を吐かず、愚痴も言わず、行政に対して大声で意見も言わず、日本人の邪魔もせず静かに四街道市民として生活しているアフガニスタン人。

今やみんな家族同然のお付き合いです。

共に笑い、共に泣き、今生きているこの同じ時間を共有し、この街で自立し、力強く幸せに生きていってほしいと願っています。

(注)「アンケート」とは「千葉の移民コミュニティの教育と福祉に関する調査—アフガンニスタン人とスリランカ人のコミュニティの現状—」千葉大学移民難民スタディーズ×NPO 法人多文化フリースクール千葉(2022) におけるアンケートを指します。

<https://www.chiba-u.ac.jp/crsgc/csmr/activities/files/outreach.pdf>

本稿は上記調査報告書に掲載した内容をもとに改稿しました。
